

---

# 天国のバー

cokoly

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国のバー

### 【Nコード】

N2851F

### 【作者名】

cokoly

### 【あらすじ】

とあるバーで酒を飲み交わす男女と、それを観察するバーテン。男の悩みは解消されるのか。。。

「ここは天国さ」

男は、ぽつりと、そう言った。

特に誰かに言って聞かせようとした言葉ではなかったようだ。その証拠に、男の周りには連れが見あたらない。一人でコニヤックのグラスを傾けている。そして終始うつむき加減の姿勢を崩さない。

「なあ、そうだろ？」

第三者から見れば、彼はグラスに向かって語りかけているように見える。

バーテンは、いつもなら声を掛けていたところだったが、どうしようか迷っていた。

何となく、今は声を掛けない方が良さそうな気がしたのだ。これは、長年、経験を積んできたバーテンとしての勘によるものだ。

幸いなことに、男の言葉はつばやきのレベルで周りに聞こえている様子もなく、他の客に迷惑にならなければ自由にさせておいても構わないだろう。悩みを抱えて一人で酒を飲みたい客だっている。

すると、隣の空席がいつまで経っても埋まらず、その空疎感に業を煮やしたらしい一人の女性客がやって来た。彼女は不安定な手つきでカクテルグラスをふらふらと宙に漂わせながら、カウンターの周辺をなめるように通過しながら男の隣にたどり着いた。目が完全に据わっていて、一目で泥酔しているのが分かる。

「ちよつとあんた、何一人でぶつくさやってんのよ」

女はそう言うなりグラスを持たない方の手を腕ごと男の肩にまわりつけてきた。物腰の一つ一つに有り余るほどの扇情的な動作が散りばめられていて、好戦的なまでだ。戦うという手段のためには目標や標的を選ばない、と言う空気が感じられる。

男はちらりと女に目をやって、

「君はどう思う？」

と聞いて、再び視線をグラスに向けた。男はあくまで冷静だった。  
「何の話？ あ、待って。小難しい話は無し。そんな気分じゃないの」

女は男の肩に巻き付けていた腕をほどき、その指先を横からむりやり男の唇に当てた。巨大な胸を張り、艶めかしい微笑みを浮かべる。もう片方の手は、グラスを空中でふらふらとさせたままだ。

「色っぽい話にして」

女はそう言うと言の顔をゆつくりと自分に向けさせ、その手を自分の口元に運び、さつき男の唇を塞いだ指先をちらりと舌先でなめ回した。

男は自嘲的な色合いの強い小さなため息を、鼻でならした。

「ここは天国だろう？」

「残念ながら違うわ。でも道は知ってるから。あたしが天国まで案内してあげる」

「すまない。今日はあんまり気分が乗らないんだ。いつもなら…

いや、別にいい」

「なあに？ 嫌なことでもあったのお？」

「いや、俺はいいんだ。俺のことはすこぶる順調だと言っていい。ただ、周りに色々と悩みを抱えてるやつが多くてね。そう言うことを色々と考えてたんだ」

「なにそれ。他人の悩みが悩みの種で、悩んでるうちにあんたが悩み始めて余計に悩み深くなったってこと？ ん？ 合ってる？ 今の」

「だいたい合ってる」

女はさつき舐めた指先を男の頬に軽く突き刺してぐりぐりとこね回していた。

「もう、そんなの忘れちゃいましょうよ」

「そうしたいんだがね。なかなかそうはいかなくて」

「わかった。あんた、カウンセラーか何かでしょう。人の悩みを聞き過ぎて食傷気味になっちゃったんだわ。きつと」

男は『おや』と言う顔をした。

「よくわかったな。その通りだ」

「ほんとに！？ わあ、当たっちゃった！ ねえねえ、私の悩み、ただで聞いてくれない？ あんたたち、聞き上手なんでしょ？」

バーテンは、一度カウンターの奥の厨房に姿を消して、しばらくしてから戻ってきた。

「Mさん、お電話が来てるんですが、お繋ぎしますか？」

男は何かが顔に当たったのだけれど、何が当たったのか全く分からない、と言う顔をして、

「俺に電話？」

「ええ。すみませんが、コードレスフォンではないので、奥でとっていただけますか」

M氏は何となく合点がいかないような顔をしつつも、バーテンの言葉に従った。

バーテンは店の奥にM氏を連れて行き、

「すみません。電話は嘘です。少々、ご気分が優れないように見受けられましたので。あの女性は退屈が我慢できない方ですから、もうしばらく待っていていれば、河岸を変えてくれますよ。それとも、余計な気配りとなってしまうたでしょうか？」

「いやいや。そんなことだったとは。ありがとう。正直、助かったよ」

バーテンは、人の良い笑顔を浮かべて、

「では、こんな所では何ですので、こちらへ」

と言つて、厨房の奥の扉を開いた。

そこには小さなベランダがあつて、控えめな大きさの丸テーブルとデッキチェアが二つ、テーブルの両脇に置かれていた。そこはバーテンが気晴らしに寛ぐための場所だという。

「地味ですが、この世の天国と言えなくもないですよ」

ベランダからは都市の夜景が一望できた。さすがにビルの裏側なので百万ドルの夜景、とはいかないものの、それは十分に美しい光景だった。

「すごいね。悩みを忘れそうだ」

男は思わずそう言った。

「常連さん専用です。ただ、予約は出来ませんので、そこはご勘弁を。頃合いを見計らってまた声を掛けます。それまでごゆっくりどうぞ。まあ、今日はMさんの貸し切りでもいいですけど」

「なんだか逆に、すまないね」

「いえいえ、とんでもない。ぜひまたお越しいただければ幸いです」

「来るよ、もちろん。むしろ回数が増えそうだ」

バーテンがカウンターに戻ると、さっきの女がグラスを空にして待っていた。

「どう？ うまくいった？」

「完璧。これであの人も店に足を運ぶ回数が増えるだろう」

「でも、来る度にまたベランダ使わせろって言うんじゃない？」

「その時は先に使っている人がいるって言うさ。あの夜景は、本来僕だけのものだからね」

「ふうん」

「また頼むよ。ありがとさん」

「いいのよ。あたしはタダ酒が飲めれば。お芝居してるのもおもしろいしね」

「そりゃよかった」

「でもたまには、あたしにもあのベランダ使わせてよ。色っぽいサービスしてあげてもいいわよ」

バーテンは、ちらりと女の顔色を見た。

「そうだな。こんど店が暇なときにでも」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2851f/>

---

天国のバー

2010年10月8日15時04分発行